

へに従ふときは放恣に續いて忽に亡滅至り、歡樂は一朝の夢と消へて、悲痛哀傷交も踵を接して迫り來たらん、豈畏れざる可けんや。かせぐに追付く貧乏あし、奮闘せざれば勝利あし。

## 延山の春曉

柳 緒 生

二日のまだほのぼのとするに、急ぎ床を離れ洗面などするに、日輪はすでに東に輾り出でんとす其の金色の春光、次第に強く、朝霞に包まれし四方の山、鈍き鉛白色の奥之院、見る／＼透きとほり、今や東山は薄き桔梗色の光を帯び、其の清麗言はん方なし。未だ霞に閉せる庭の櫻花、彼方よりきこゆる讀經の聲、濃霞の裡に眠る鶯谷には、老の鶯のそれにも似ず、恥しげに二聲三聲法華經！春の女神の佐保姫が、たくみの美、賤敗の吾れに新しき希望を與へ、靈しき光明、胸に復活の生命を與ふ、噫偉大ある哉春の曙。

## 本院内諸堂案内記

山 内 慧 戒

菩提梯に登りて天門に達し、正面の赤い御堂は祖師堂である。左の空地は本堂建設地。彼の向ふの高き峯は思親閣の靈場身延奥の院である。登口に老杉一本屹立して居る下卒塔婆の行儀能く建てる塔場所と云ふ。轉回して後方に見へる嶺は、鷹取山である。祖師堂に一禮し右折して進めば右に小さきトタン葺きの屋根は、鶯谷寮とて祖山學院生の寄宿舎と教場の一部。左方小高き處の白壁の堂は、宗祖の御眞骨堂。其の前は拜殿である。其れより釋迦堂、納骨堂と並び、正面大玄關に鳳凰の彫刻ある棟は大客殿にして、其の次に建てるは法喜堂である。此堂内に這入つて、事務所より開扉の札を戴き、客殿の龍の間、松の間、千疊敷、正面の額鎮國道場は大宰府宮小路康文氏の筆、床上の軸南無妙法蓮華經は支那人某の筆、左折して往けば納骨堂に到る。三寶諸尊の兩脇に安置せるは